

日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の複合動詞“～进/入”類との対照研究 － 認知意味論からのアプローチ －

王 秀 英

キーワード: 「～こむ」、「～进/入」、基本義、拡張義、プロセス

要 旨

本稿は、日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の複合動詞(動補式)“～进/入”を対象として、認知意味論の理論に基づき、主にコーパスと辞書から検索したデータを利用して、それぞれの意義拡張のプロセス、意味合いの特徴を明らかにすることを目的とする。結果として、日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の動補式“～进/入”類それぞれの持つ各意味間の関連性と意味拡張のプロセス、意味拡張の方法が明らかになった。

1. はじめに

日本語の複合動詞は日常生活の中でも使用率が高い語彙である。しかし、同じ複合動詞が異なったいろいろな意味を持つという現象も少なくなく、複合動詞の意味を体系的に捉えるのは難しい。

認知意味論では、ある単語がいくつかの意味を持つこと、即ち意味の拡張には人間の身体的経験が背景になっており、また基本義と拡張義との間には関連性があると考えられる。

認知意味論のメタファー、メトニミー、シネクドキーの3つの比喩を用いれば、一つの語の持つ異なる意味同士の関連性を明らかにすることが可能であり、山梨(2000: 139～140)でも、日常言語の概念構造は、外部世界の知覚、経験を基盤とする様々なイメージ・スキーマによって動機付けられており、我々は、空間認知、運動感覚等に関わる具体的な経験を通して外部世界を意味づけして、状況によって具体的なイメージ・スキーマを拡張し、この拡張されたイメージ・スキーマを介してより抽象的な対象を理解できる、と指摘されている。

そこで、本稿では、認知意味論の観点(3つの比喩とイメージ・スキーマ)に基づいて、複合動詞「～こむ」の意味合いと基本義から拡張義までの拡張プロセスについて

分析し、日本語の「～こむ」類の複合動詞とそれに対応する中国語の動補式“～進/入”の異同点を明らかにする。

2. 先行研究および問題点

姫野(1999)は日本語複合動詞「～こむ」の用法を大きく内部移動と程度進行に二分している。内部移動を表す表現は「移動先の領域が有する形態の特徴」によって「閉じた空間、固体、流動体、集合体または組織体、動く取り囲み体、自己の内部、その他」の7つに分けられ、程度進行を表す表現は「前項動詞の意味特徴」によって「固着化、濃密化、累積化」の3つに分けられるとしている。

中村(1998)は複合動詞の前項と後項の関係や各項の役割から、複合動詞を性質の異なったいくつかの型に分けて、それぞれの型ごとに多様な表現領域が存在することを指摘している。言語認知の立場から複合動詞「～こむ」の前項動詞の特徴を詳しく分析し、後項動詞との結合の特性について考察している。

松田(2004)は認知意味論の観点から日本語複合動詞「～こむ」が有するスキーマ的な意味をコア図式を用いて(学習者が理解しやすい一つのモデルで)捉えようとしている。前項動詞に「内部への位置的移動」の意味を含むかどうか、及び、助詞「に」に接続するかどうかの二つの基準によって複合動詞「～こむ」を4つのタイプに分類している。

郑(2007)は日本語の複合動詞「～こむ」には姫野(1999)が指摘した2種類のほか、「ずっと、絶えず」の含意もあると指摘している。

金(2009)は日本語の複合動詞「～こむ」と中国語の“～進”を比較して、中国語の“～進”は、「内部移動」という意味しか持たないが、日本語の「～こむ」は「移動した後の位置に入って、なかなかその中から出てこない」という意味のほか、主体或いは客体が物理的移動をした後の状態をも表すことができると述べた。また、それぞれの構文的特徴についてもまとめている。

金(2010)は「私たちが有する概念構造は身体性を反映するものである」という認知言語学の基本理論に基づき、日本語複合動詞「～こむ」と関わっている身体的・経験的動機付けを3つの側面から検討している。図式を用いることによって、内部移動のほかに、反復の意味にも解釈できる中間段階を経て、反復の意味を有する新しい構文スキーマが抽出できるようになることを示している。また、反復の意味を表す「～こむ」において、前項動詞は、学習やトレーニングのようなドメインを持つ表現に限られる

傾向が強いと指摘している。

睦(2012)は「程度進行」の意味を持つ「～こむ」をカテゴリカルな意味や構文構造により、自他合わせて11のグループに分けた上で、前項動詞の意味特徴、構文構造、例文内で共起する名詞や副詞の意味特徴について、グループ間での比較を行っている。

以上、先行研究を概観したが、先行研究においては、複合動詞「～こむ」に含まれるすべての意義を分析しているが、各意味間の関連性、基本義から拡張義までの発展プロセスについては、まだ十分に明らかにされていないのが現状である。

3. 認知意味論について

どのような言語においても、二つ以上の意味を持つ語が数多く存在する。社会の発展にしたがって、言語が際限なく増えていく中で、言語の豊かさを保つとともに、言語使用者の記憶の負担が大きくなるように、既存の言葉を新しい事物や考え方にも用いることになる。語義の拡大はその一種であると言えよう。

言語学習者が、二つ以上の意味を持つ語の意味体系、特に抽象的意味を捉えるにあたっては、山梨(2000:7)によって、言語現象の背後にある感覚的な経験、外部世界との相互作用に根ざす身体的な経験と関連づければ理解が得られやすいである。身体化の立場をとる認知意味論の考え方を利用すれば、それぞれの語の基本義と拡張義の間の関連性、基本義から拡張義までの発展プロセスについて、感覚的に捉えることができると考えられる。

本稿では、日本における佐藤(1992)らのレトリック研究の成果(メトニミーの概念を大きく拡張して、接触や部分などの隣接性だけでなく、隣接性は広く理由や因果関係などとしてもよい)を踏まえ、意義拡張のプロセスとしてメタファー、シネクドキー、メトニミーという3つの比喩とイメージ・スキーマを用いて、松本(2003)の3つの比喩の定義に基づき、日本語の「～こむ」類の複合動詞と中国語の動補式「～進/入」を一例として取り上げ分析する。

3-1. 松本(2003)における比喩の定義

A. メタファー:二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

(例)正月休みに食べ過ぎて、ブタになってしまった。

「ブタ」の太っている(と一般に思われている)体型一文を発した人の体型

B. シネクドキー: より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、或いは逆により特殊な意味を持つ形式を用いてより一般的な意味を表す比喻。

(例) 花見 「花」-「サクラ」(一般的なもの—特殊なもの)

人はパンのみにて生きるにあらず。 「パン」-「食べるもの一般」(特殊なもの—一般的なもの)

C. メトニミー: 二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喻。

(例) 部屋を片付ける。 「部屋」-「部屋の中にある何らかのもの」

黒板を消す。 「黒板」-「黒板に書かれた文字など」

3-2. イメージ・スキーマ

辻幸夫(2003:70, 135)はイメージ・スキーマについて、「身体が世界と出会うことから直接的に立ち現れてくる知識構造として、イメージ・スキーマがある。イメージ・スキーマには〈上/下〉〈前/後〉〈内/外〉〈中心/周縁〉〈部分/全体〉〈容器〉〈連結〉〈起点/経路/終点〉などがある。イメージ・スキーマ(image-schema)は、「イメージ図式」とも呼ばれ、知覚や運動(物の動き)のパターンが反復的に経験されることを通じて抽象化され、形成される前言語的な表象である。身体性を基礎に持つところが特徴的で、①前言語的なレベルで設定されること、②生得的なものがある一方、運動・身体的に繰り返される経験から形成されること、③物理的な事象だけでなく抽象的な事象を把握するための基本ツールになること、に特徴がある」と記述している。また、Johnson(1987:29)は、「イメージ・スキーマとは、私たちの行動、知覚、概念の中に繰り返し現れるパターンや形、規則性のことである」と述べている。

4. 今回の研究対象

日本語の複合動詞「～こむ」は中国語に訳す際、通常は動補式(複合動詞)“～进/入”に訳される場合が多いが、先行研究で指摘されている「内部移動」、「程度進行」、「ずっと、絶えず」、「反復」という意味のみでは、複合動詞「～こむ」の全体の意味を十分に捉え切れていないと考えられる。また、同じ語形の複合動詞が持つ異なる意義同士との関連性も明らかにされていない。

辞書においては、日本語の「～こむ」類の複合動詞と中国語の動補式“～进/入”につ

いて、次のように記述されている。(なお、本稿では現代語を対象とし、古典語についての記述はここでは含めない)

(1) 日本語の複合動詞「～こむ」

動詞の連用形に付けて用いる。

- ①(自動詞に付けて)あるものの中に入る。「上がりこむ」、「溶けこむ」、「吹きこむ」、「逃げこむ」など。
- ②十分にする。過度にする。また、長く続ける。「走りこむ」、「老けこむ」、「煮こむ」、「寝込む」など。
- ③心がとざされ、他を受け付けられない状態です。「考えこむ」、「沈みこむ」、「塞ぎこむ」など。
(『日本国語大辞典』第二版)

(2) 中国語の動補式“～进”と“～入”

・“～进”

動詞の後に付属してその動作が中へ入り込むことを示す。

闯进去(飛び込んでいく)、买进一批货来(品物を買って込んだ)など。

(『岩波中国語辞典』簡体字版)

・“～入”

外から中に入る。流入(流れ込む)など。

(『中国語大辞典』)

姫野(1999)は、「～こむ」の複合動詞のうち約8割は、主体或いは対象がある領域の中へ移動することを表している。これを「内部移動」と呼ぶ」と述べているが、以上に挙げた辞書の記述からは中国語の動補式“～进/入”も「内部移動」の意味を表すことがわかる。また、筆者が日中対訳コーパス(以下「日中対訳」と略する)のデータを分析した結果、「内部移動」を表す日本語複合動詞「～こむ」のうち中国語の動補式“～进/入”に訳される例が約85%を占めることがわかった。(以上の辞書における中国語の動補式“～进”と“～入”の解釈はほぼ同じであるため、本稿では“进”と“入”の区別を扱わないこととする。)

5. 日本語の複合動詞「～こむ」と中国語の動補式“～进/入”の意味分類

5-1. 日本語の複合動詞「～こむ」の表す意味合い及び意味ごとの統語的特徴

I 内部への移動を表す

- ①物理的な内部移動を表す……ex. 運び込む、担ぎ込む、差し込む、押し込む、巻き込む、飛び込む、住み込む、投げ込む、紛れ込む、踏み込む、誘い込む。

動態性の強い動詞が「こむ」と結合した場合、基本的な用法における動作の移動先は具体的な場所である場合がほとんどである。前項の動詞の影響を受けて、主体が具体的な場所の中に入ることを表す。

- (1) いっその事角屋へ踏み込んで現場を取って抑えようと発議した。(日中対訳コーパス『坊ちゃん』)
- (2) 窓を開けると、冷え冷えとした秋の夜気が室内へ流れ込んで来た。(日中対訳『あした来る人』)

このタイプの複合動詞「～こむ」は数が多く、イメージ・スキーマ¹は次の図1のように示すことができる。



図1 物理的な内部移動を表す複合動詞「～こむ」のイメージ・スキーマ

- ②抽象的内部移動を表す……ex. 巻き込む、押し込む、落ち込む、溶け込む、追い込む、切り込む、食い込む、差し込む、振り込む、払い込む、滑り込む。

派生的な用法としては、比喩によって物理的な内部移動の意味から派生した用法で、普通は移動先として具体的な場所が示されないが、明示されることもある。その場合の動作の移動先は無形になっているため、メタファーの用法を経て意味①から生じた拡張義と言える。

- (3) 日露戦争はこの青年をもまきこんでいった。(日中対訳『近代作家入門』)
- (4) だが、記憶はそこで、とだえてしまう。あとは、ながい、息づまるような夢のなかにまぎれこむ。(日中対訳『砂の女』)

このタイプの複合動詞「～こむ」は例文によって、物理的内部移動と抽象的内部移動を表すことができる。用例数が多く、上に述べた「物理的内部移動」の意味から拡張して、「抽象的内部移動」の意味に変わる。両者の経路は同じで、ある「容器」の中に入るという意味を表すが、「物理的内部移動」の場合は、移動の主体と容器が具体的なものや場所を指し、「抽象的内部移動」の場合は、移動の主体と容器は抽象化され、具体的なものや場所は無形になって、抽象的なものになる。メタファーの用法を経て生じたものと言える。その時の複合動詞において前項動詞の表す主体の静態性は強いと考えられる。このタイプの複合動詞「～こむ」の表すイメージ・スキーマは次の図2のように示すことができる。



図2 抽象的な内部移動を表す複合動詞「～こむ」のイメージ・スキーマ

Ⅱ 程度進行を表す……ex. 考え込む、思い込む、決め込む、考へ込む、信じ込む、話し込む、せがみ込む、頼み込む、磨き込む、塞ぎこむ、当て込む。

このタイプの複合動詞「～こむ」は、前項動詞が主に主体の状態、感覚、知覚、意識的なもの、或いは状態性を表す場合が多い。

(5) しかし父は跳びかかるかわりにぐったり躰を倒し、そのまま再び眠りこむ様子だった。(日中対訳『飼育』)

(6) でもね、その女の子の親はそう信じこんでいて、近所の人みんなにそのこと言いふらしてるのよ。(日中対訳『ノルウェイの森』)

このタイプの複合動詞「～こむ」は上に挙げた例のように、前項動詞が主に主体の感覚、知覚、意識、状態的なものであり、「十分に」、「すっかり」、「しっかり」、「ぐっすり」などの程度の強さを表す副詞と共に起させることができ、抽象的内部移動を表す意味から転じていると考えられる。これらのプロセスは次の通りである：主体がある「容器」の中に入って、この「容器」の中から「容器」の中心部に移動して、移動した後の状態や結果を保持し続け、結果として「動作・作用の進行にしたがって程度が深くなる」という意味になる。抽象的内部移動からメタファー（経路は抽象的内部移動と同じである）を経て生じると考えられる。これらの複合動詞「～こむ」の表すイメージ・スキーマは次の図3のように示すことができる。



図3 程度進行を表す複合動詞「～こむ」のイメージ・スキーマ

Ⅲ 前項動詞の動作が長く続くことを表す……ex. 座り込む、黙り込む、走り込む、鍛え込む、泳ぎ込む、歌い込む、使い込む。

このタイプの複合動詞には、前項動詞の動態性の強いものと静態性の強いものの両方が存在している。

(7) ただ何をするともなく座りこんだりした。(日中対訳『ノルウェイの森』)

(8) さらにレベルアップを目指し、冬場は体を鍛え込んだ。(『朝日新聞』2002年3月)

30日朝刊)

このタイプの複合動詞はトレーニングに関する動詞が多く、長時間にわたってある動作や行為を行って、累積して一定の結果を生じると考えられる。ただし、(7)のような例では、前項動詞の静態性が強く、複合動詞全体がある状態の続くことを表すのに対して、(8)のような例では、前項動詞は動作性が強く、ある動作や行為の続くことを表す。これらの複合動詞の後項動詞「こむ」は副詞「ずっと」或いは動詞「続ける」に言い換えられると考えられる。動作性の強い例文において、時間の長さを表す時間副詞や頻度の高さを表す成分と共起する機会が多いため、主体の意図性が強い。これらの複合動詞「～こむ」の表すイメージ・スキーマは次の図4のように示すことができる。



図4 前項動詞の動作が長く続くを表す複合動詞「～こむ」のイメージ・スキーマ

IV 前項動詞の動作や行為の量の多さ(過度)を強調する……ex. 着込む、立て込む、使い込む、買い込む。

これらの複合動詞の後項「こむ」は主に主体や客体の動作は一定の量をオーバーするという意味を強調している。

(9)彼女は風邪のせいで、浅ましく着込んでいました(現代日本語書き言葉均衡コーパス『天才博士の奇妙な日常』2001)

(10)災害に備えて食料品を買い込む。(『三省堂スーパー大辞林』)

このタイプの複合動詞は、副詞「たくさん」と共起させることができる、複合動詞における前項動詞の動態性が薄く、静態性が目立っていると言える。特に後項の「こむ」と結びつくによって、複合動詞全体の静態性がより強くなると考えられる。イメージ・スキーマは次の図5のように示すことができる。

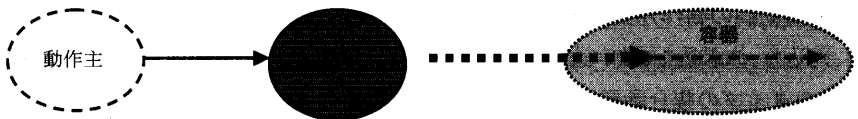


図5 前項動詞の動作の量の多さを表す複合動詞「～こむ」のイメージ・スキーマ

上に述べたⅢ類とⅣ類の複合動詞「～こむ」は、Ⅱ類の「程度進行」の意味からメトニミー(前項動詞の動作を長く続けることによって程度が深くなる或いは前項動詞

の動作を多くすることによって結果として程度が深くなる)を経て生じたものである。このⅢ類とⅣ類の間にもまた、因果関係が存在し、メトニミーによって「前項動詞の動作を長く続ける」の意味から「前項動詞の動作の量の多さ」の意味を生じる(動作・行為の量は動作・行為を長く続けるにしたがってだんだん多くなるという点で、両者の間に因果関係が存在している)と考えられる。

以上の複合動詞「～こむ」の4つの分類のうち、「物理的移動」と「抽象的移動」を表すタイプの場合、前項動詞は動作主或いは主体の動作や行為を表し、後項動詞「こむ」は方向性を表し、前項動詞の補足的な働きをしている。「程度進行」(意味Ⅱ)、「前項動詞の動作を長く続ける」(意味Ⅲ)と「前項動詞の動作の量の多さ」(意味Ⅳ)のタイプにおいて、後項動詞「こむ」の表す意味は程度の強さや量の多さ(意味Ⅳ)と関連性が強く、前項動詞を修飾する役割をしていると言える。

日本語の複合動詞「～こむ」の意味ネットワークは以下の図6のように示すことができる。

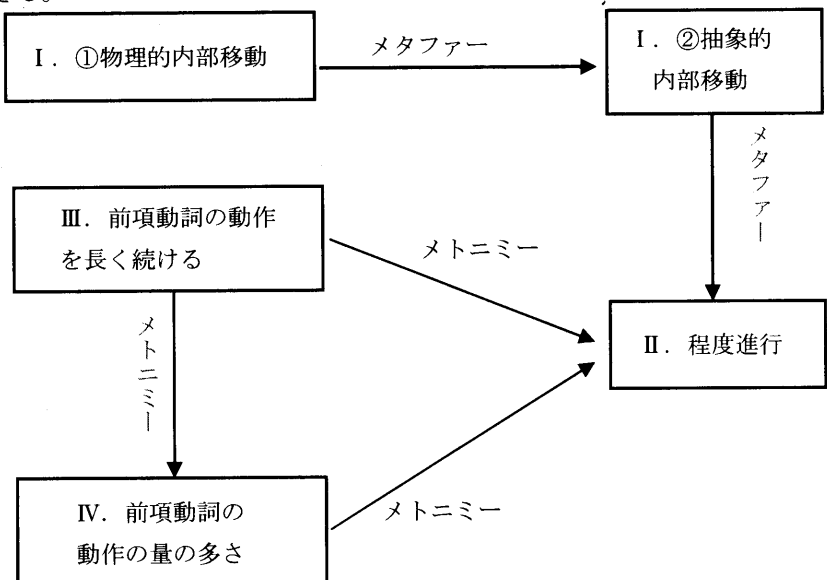


図6 日本語の複合動詞「～こむ」の意味ネットワーク

複合動詞「～こむ」には、マイナスの意味で使われる例、プラスとマイナス両方の意味で使われる例、中立的な意味で使われる例なども観察される²⁾。しかし、それらの意味合いは複合動詞自体が持つものではなく、文脈により生じていると考えられる点

を補足したい。

5-2. 中国語の動補式“～进/入”の表す意味合い及び意味ごとの統語的特徴

これらの動補式も日本語の「～こむ」類の複合動詞と同じように、物理的移動を表す用法と抽象的移動を表す用法に分けられる。

内部移動を表す

①物理的内部移動を表す……ex. 卷进、插进、抬进、插入、流入など。

この用法の場合は移動先として具体的な場所やスペースが明示される例が多い。

(13) 一个人不行, 圆木会把人也拖进洪流。(日中对訳《插队的故事》)

訳文: ひとりが失敗すると、丸太は人間を濁流の中に巻きこむ。

(14) 维嘉趁机纵身跳下高台, 混入人群。(日中对訳《轮椅上的梦》)

訳文: 維嘉は演壇の下に身を踊らせ、聴衆の中に紛れ込む。

②抽象的内部移動を表す……ex. 卷进、走进、跌进、渗入、陷入など。

・前項動詞は、主体が目に見えない「容器」の中に入ること、後項の補語は動作の発生後の主体の状態を表す。「容器」が無形化した、抽象的な用法である。

(15) 不是倪萍也被汹涌前进的革命的洪流卷进去了吗? (日中对訳《活动变人形》)

訳文: 倪萍でさえほうはいと逆巻く革命の激流に巻き込まれていったではないか。

(16) 他知道自己已经落入了深渊, 已经没顶。(日中对訳《活动变人形》)

訳文: 底なしの淵に陥ちこんで頭まで没した彼であったが、やがてそのガニ股の足で再び立ちあがったのは正に奇蹟であった。

この用法は例(15)と例(16)のように、ある動作によってある結果或いは状態をもたらす、という意味を主に表す。これは基本義(物理的内部移動)からメタファーを経て拡張された意義(抽象的内部移動)と言える。この場合は動作の移動先は無形になり、「物理的移動」の意味を表す場合は前項動詞の動態性が強いのに対して、「抽象的移動」の意味を表す場合には、前項動詞の静態性が顕著である。

「内部移動」を表す中国語の動補式“～进/入”のイメージ・スキーマは内部移動を表す複合動詞「～こむ」(図1と図2を参照のこと)と全く同じであるため、ここでは省略する。

中国語の動補式“～进/入”の意味ネットワークは以下の図7のように示すことができる。

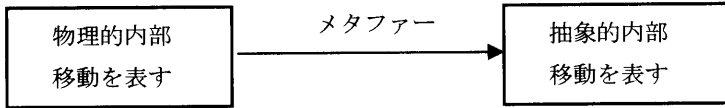


図7 中国語の“～進/入”の意味ネットワーク

6. まとめと今後の課題

以上、日本語の複合動詞「～こむ」と中国語の動補式“～進/入”のそれぞれの意味合いと意味ごとの統語的特徴を認知意味論の立場から分析した。その結果、以下の3点が明らかになった。

- ①日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の動補式“～進/入”類のそれぞれの各意味間の関連性と意味拡張のプロセスが明らかになった。
- ②物理的内部移動と抽象的内部移動(意味Ⅰ)を表す時、「～こむ」類と“～進/入”は対応しているが、日本語の複合動詞「～こむ」の持っているほかの意味(意味ⅡⅢⅣ)を中国語の動補式“～進/入”は持っていないため、両者は完全には対応していないことが判明した。
- ③意味拡張の方法において、日本語の複合動詞「～こむ」はメタファーとメトニミーを経て、意味の拡張を実現させているが、中国語の複合動詞“～進/入”は、メタファーのみを通して意味を拡張させていることがわかった。

日本語の複合動詞「～こむ」が中国語の動補式“～進/入”よりも広義であることの原因については今後の課題として、方向性を表す複合動詞の日中対照を通して明らかにしていきたい。

注

¹ 本稿の図1から図6において、細い点線は抽象的な場所を表し、太い点線は必ずしも存在するわけではないことを表し、実線は必ず存在することを表す。細線矢印は動作主が主体に力を加えることを、太線矢印は主体の移動を表し、細い点線矢印は主体の状態変化を表し、太い点線矢印は時間の経過を表す。また、自動詞の場合、動作主と移動の主体がイコールの関係である場合が多い。

² マイナスの意味で使われる例:「泥棒が家に入り込む」、「他人の家に住み込む」、「肉片を丸ごと飲み込む」、「学生がテスト中に禁じられた本を持ち込む」、「自宅へ人質を連れ込む」。プラスとマイナス両方の意味で使われる例:「公金を使い込む」と「使い込んだ万年筆」、「売り込んだ商標」と「情報を売り込む」(修飾成分として使われる場合はプラスの意味、述語成分として使われる場合はマイナスの意味を表すことが観察される)。具体的な位置移動を表す場合は中立的な例が多い。

参考文献

- ジョージ・レイコフ(1993)『認知意味論』(池上嘉彦・河上誓作訳)紀伊国屋書店
 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

- Johnson, mark (1987) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason.* Chicago: University of Chicago Press.
- 金光成 (2010) 「複合動詞の意味拡張とその認知的動機付け－「V+こむ」を事例に－」『言語科学論集』16, pp. 25 - 42
- 金慧蓮 (2009) 〈从认知角度看复合动词「～こむ」的句法及语义特点－与汉语趋向动词“～进”比较〉《日语学习与研究》3, pp. 59 - 65
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』大修館書店
- 睦俊秀 (2012) 「程度進行」の意味をもつ複合動詞「V1+こむ」の意味と構造に関する考察」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8, pp. 185 - 208
- 中村その子 (1998) 「日本語複合動詞の意味形成と特性: 言語認知の立場から」『経営・情報研究: 多摩大学研究紀要』2, pp. 65 - 155
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社
- 郑文全 (2007) 〈复合动词「込む」意义浅析〉《日语知识》1, pp. 10 - 11
- 辻幸夫 (2003) 『認知言語学への招待』大修館書店
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版

用例出典

- 『日本国語大辞典』(2001) 第二版 小学館
- 『三省堂スーパー大辞林』(1999) 三省堂
- 『中日・日中辞典』(1999) 統合版 小学館
- 《沪江小D 日语词典》(2012) <http://dict.hjenglish.com/jp/>
- 『岩波中国語辞典』(1990) 簡体字版 倉石武四郎著 岩波書店
- 『中国語大辞典』(1993) 大東文化大学中国語大辞典編纂室編 角川書店
- 『日中対訳コーパス』(2003) 北京日本語研究センター
- KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>
- 『朝日新聞』<http://www.asahi.com/>